

令和7年12月14日（日）

12月14日以降、公式代表団一行は、広沢市長一行と離れ単独で調査を行った。

12月14日、公式代表団一行は、トリノ国立自動車博物館、ヴェナリア宮殿保存修復センターを訪問し、調査を行った。

ヴェナリア宮殿保存修復センターでの調査後、公式代表団一行は、陸路でミラノ市へ向かった。

### トリノ国立自動車博物館（博物館施策調査）

- 時 間：12月14日（日）午前10時20分から正午
- 場 所：トリノ国立自動車博物館（トリノ市）
- 対応者：渉外・パートナーシップ責任者 エリザベッタ・アシェリ氏  
博物館学芸員 ほか

名古屋市とトリノ市は、ともに自動車産業のまちであり、この自動車という共通の文化を通じて、今後、一層の友好交流の進展が期待される。

トリノ国立自動車博物館（M A U T O : Museo Nazionale dell'Automobile）は、イタリアを代表する自動車メーカー「フィアット社」創業の地であり、イタリアの自動車産業の中心地トリノにある、自動車の歴史と文化を学べる博物館である。

トリノ国立自動車博物館では、エリザベッタ・アシェリ氏の挨拶の後、博物館学芸員による案内の下、館内の視察を行った。



エリザベッタ・アシェリ氏（左から2番目）



トリノ国立自動車博物館の1階

(トリノ国立自動車博物館)

1933年に設立され、1939年に一般公開されたイタリアで最も古い自動車博物館。イタリア統一150周年を記念して全面的に改装・拡張され、2011年にリニューアルオープンした。2013年には、タイムズ紙が「世界で最も美しい美術館50選」に選出している。

博物館では、19世紀後半の蒸気馬車から現代まで、80社の自動車メーカーから200台以上の車両を所蔵している。

博物館では、幼稚園や学校の児童生徒を対象に、ガイドツアーやワークショップ、実習訓練などの教育活動プログラムを実施している。

■視察の様子



ボルディーノ蒸気馬車 (1854年)  
馬車を改造、近代の乗用車の始まり



フィアット 3 1/2 HP (1899年)  
フィアットで最も古い車、エンジンは後部に



チェイラーノ 5 HP (1901年)  
エンジンは前方に、後輪駆動



フィアット 8 HP (1901 年)  
大会でイタリア全土 (1,640 キロ) を走破



イタラ 35/45 HP「北京-パリ」(1907 年)  
北京-パリ (約 16,750 キロ) を 5 日間で走破



イゾッタ・フラスキーニ 8A (1929 年)  
イタリア製の高級車でハリウッド映画  
「サンセット大通り」でも使用された



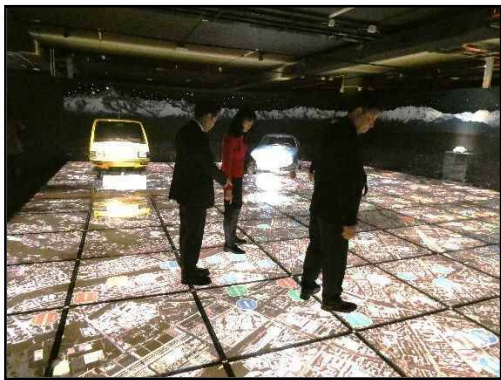
フィアット・タービナ (1954 年)  
飛行機に使用するエンジンを搭載、最高  
速度は 260 km/h



トラバント 601 (1987 年)  
ドイツ製、車体は特殊なプラスチック



トリノ市で実証実験中の自動運転バス  
「TO MOVE」(7 人乗り)



トリノの地図上には過去から現在までの自動車工場の場所が多く示されており、右側の写真では、「LANCIA（ランチア）」の名前が確認できる



「フェラーリデザイン」 CREATIVE JOURNEYS 2010-2025 の展示



フェラーリのデザイナー  
フラヴィオ・マンゾーニ氏

(学校教育における博物館の活用)

当博物館には多くの学生が学習に訪れ、ここの教育活動プログラムを利用している。

一つは、トリノ工科大学のような大学などから、エンジン関係について調べたいと依頼がある。もう一つは、中学校・高校などからガイドツアー等で見学に来れる。いずれの場合も、博物館側から学校に働きかけるというより学校側から依頼がある。

トリノ市を含むピエモンテ州は自動車産業が盛んであるが、自動車の修復には特別で重要な技術が必要であることから、エンジニアを目指す大学生を対象に講習会を開催している。そこで、自動車を修復するための技術の浸透が大切であることを伝え、また、現代の車と100年前の車を修復するのとは異なる技術が必要だということも学んでいただくが、そのような人材が出てくることは博物館として非常にうれしいことである。



## ヴェナリア宮殿保存修復センター（文化財保存事業調査）

- 時 間：12月14日（日）午後2時20分から午後4時20分
- 場 所：ヴェナリア宮殿保存修復センター（トリノ市）
- 対応者：保存修復センター所長 アルフォンソ・フルギス氏  
修復研究所・上級研修スクール所長 ミケーラ・カルディナーリ氏  
科学研究所所長 フェデリカ・ポッツィ氏  
上級研修・教育サービススクール長 ララ・コニーリオ氏  
戦略企画・国際化担当部長 シルヴィア・サバト氏 ほか

ヴェナリア宮殿は、17世紀半ばにサヴォイア家の夏の別荘として建てられ、18世紀に大改築された宮殿である。1999年から大規模な修復工事が行われ、2007年に再び一般公開された。

ヴェナリア宮殿保存修復センター（CCR：Centro Conservazione Restauro La Venaria Reale）は2005年に開所。ヴェナリア宮殿の文化財のほか、世界各地から持ち込まれる様々な文化財も修復しており、修復士の養成学校も兼ねる。

ヴェナリア宮殿保存修復センターでは、保存修復センター所長 アルフォンソ・フルギス氏の挨拶の後、保存修復センターの取組について説明を聴取しながらセンター内の視察を行い、最後に西川議長の挨拶で締めくくった。

なお、訪問当日は日曜日であり本来は休業日のところ、ご厚意により特別にご対応いただいたものである。



ヴェナリア宮殿



挨拶するフルギス氏（1番左）

## ■保存修復センター所長 アルフォンソ・フルギス氏の挨拶（要旨）

今回、こうして訪問いただき大変光栄である。当センターまで通ってきたところは、かつて宮殿の厩舎だった場所である。今年の姉妹都市提携 20 周年は、当センターの開所 20 周年とも重なる。私は日本、そして武士道に好感を持っている。

本日、これから視察いただくことで、私たちの修復に対する思いを感じていただけたと思う。私たちは外国の文化財も修復するが、修復によりその国の文化・伝統を知ることができる。私たちの取組を見ていただき理解いただくことで、ここから深い交流が始まればと思う。

## ■説明の概要（質疑応答の内容を含む）及び視察の様子

保存修復センターは大学と連携をとっており、文化財を修復する場合、大学の先生、学生、修復士、サイエンス担当者が共同して一つのことに取り組む。センターでは、修復を行うだけでなく教育的な情報発信も行っている。



扉には Chimica (chemistry) の文字



絵画など修復が必要な文化財が運ばれてきたときに、修復には何が必要かを把握するため、損傷の程度や色、素材などをまずここで化学的に分析する。

ここで分析をする以外にも、機器を分解して美術館などに持ち出し、外で分析を行うこともある。



拡大するための機器

この機器（右の写真）は、レントゲンをとるための特注の機器で、イタリアで一つしかない。

この機器により、中を開かずして内部の状態を確認することができ、トリノ東洋博物館の仏像を修復する際も、この機器で木の状態などを分析したほか、エジプト博物館のミイラの解析でもこの機器を活用した。



修復は短期間でできるものではなく非常に調査期間を要し、夜中まで仕事をすることもある。なお、イタリアでは、修復士は「芸術の医者」とも称されている。

保存修復センターでは、100人の修復を学ぶ学生から25人を選定して受け入れており、一つの修復カテゴリーに5人の学生が所属し、学んでいる。

修復する部屋は九つに分かれており、これからその一部を紹介する。

絵画を修復するこの部屋は、湿度・温度がコントロールされている。

この絵画（右上の写真）は教会に掲げられていた11メートルある絵画で、丸めて運ばれここで修復される。



絵画が当時のまま残る必要があり、物的な面での把握とともに時代考証も必要であることから、修復にはサイエンス系の先生と歴史の先生の双方の力が不可欠である。

オリジナルの物を壊さないことがまず重要であり、その時代に描かれたものと同じものが見られるような修復をする必要がある。また、修復直後だけでなく、その絵画がずっと残っていくような修復をしなければならない。



この彫刻（右の写真）は、修復中の聖者バルトロメオ像で、ここに来たときは白っぽい色をしていたが、塗料を取り払い、地の色が出ている状態。

何百年も経過しており眉の部分などが欠けているため、これらも修復していく。



このひつぎ（右の写真）はエジプト博物館に所蔵されていたもの。

経年により色彩が黒っぽくなっており、水が使えずデリケートであるため、レーザーで汚れを落としていく。

修復作業に入る前に、緻密に調査を行っておく必要がある。



保存修復センターでは、博物館・美術館からのほか、貴族家系の邸宅から依頼を受けて修復しているものもある。

この漆の作品（右の写真）は、フイレンツェの美術館から修復の依頼を受けたもの。

これら修復を行う東洋の作品は、日本より中国のものがかなり多い。修復に当たっては、日本の漆職人とも連携している。



文化財をいつの時代のものに修復するかの方針について、作品によって異なり、オリジナルのものに戻したいというのが一番であるが、100年後に修復したものがオリジナルのものよりもよかったという場合もあり、その状況によって修復を考えることになる。

修復というのは、修復に直接携わる人だけでなく、文化財を鑑賞する人など周りの人々の修復に対する関心があるからこそ成立するものである。

保存修復センターでは、イスラエルの教会の床の修復も手掛けており、サウジアラビア、エチオピア、コロンビア、中国でも修復に携わっている。

これらの外国での修復においては、単に修復することのみならず、修復のための技術を提供する取組もかなり行っている。

#### ■西川議長の挨拶（要旨）

今日は、クリスマスの前の大切な休業日にもかかわらず、我々のために貴重な時間をとっていただき、心から感謝申し上げます。

我々は今回、トリノ市と名古屋市の姉妹都市提携20周年の公式代表団として訪問させていただきました。



フルギス所長をはじめ本日ご対応いただいた皆さんには、芸術、美術品に対する思い、現状や作業の方法など様々なことを教えていただくことができた。

伝統、文化はしっかりと守っていかなければならないと思うし、それは様々な時代背景の中で作り上げられたもので、そのときの時代の歴史観をしっかりと勉強しながら、それとともに、レントゲンやマイクロスコープのような最新技術も併せ持っており、昔のものをしっかりと次の時代につなげていこうという、非常に難しい作業を皆さんしているということに改めて感じた。

私たちはトリノ市に来て5日目になるが、まちの中すべてが文化財のようで、その町並みに圧倒されるような素敵なまちであり、皆様方が活躍する場がこれからますます出てくるのではないかと考えている。

フルギス所長には、日本、そして武士道に好感を持っていると言っていた。我々は、名古屋市は武士のまちだという誇りを今でも持っている。名古屋城や様々な文化財があり、それを修復していくためには、宮大工という技術者が必要であるが、今、人材不足で非常に困っており、課題だと思っている。

その点、ヴェナリア宮殿保存修復センターにおける、学生、若い方たちに対する技術の伝承の取組についてお話を伺い、人材育成は非常に大事だということに改めて感じるとともに、しっかりと参考にさせていただきたいと思った。

トリノと名古屋が今後とも友好をしっかりと深めるというのは、言葉では簡単だが、人の行き来、交流、文化芸術、音楽、食、様々なことがある。もう一つは、日本の技術者を招いていただき、学生との交流を通じて、文化財の保存修復の技術の継承について名古屋にもご指導、ご教示いただきたいと思っている。

今日は本当に皆様方にお世話になり、感謝申し上げます。私は、プレミアムな年にこのトリノに来ることができ、また、技術の継承という大きなキーワードを頂戴したので、名古屋でもそれをどうやったら次へとつなげていくことができるか、我々も、しっかりと頑張っていきたいと思う。



令和7年12月15日(月)

12月15日、公式代表団一行は、ミラノの郊外・ロー市にあるフィエラ・ミラノ、ミラノ市にあるセントラル・デッラ・アクアを訪問し、調査を行った。

### フィエラ・ミラノ（産業経済状況調査）

- 時 間：12月15日(月) 午前10時から午後0時20分
- 場 所：フィエラ・ミラノ（ロー市）
- 対応者：フィエラ・ミラノ国際課職員（タビデ氏、ニコーラ氏）

フィエラ・ミラノ（Fiera Milano Rho）は世界最大級の展示会場であり、ミラノ・コルティナ2026冬季オリンピックでは、スピードスケート、アイスホッケーの競技会場や国際放送センター、メインプレスセンターとして活用される。

フィエラ・ミラノでは、同国際課職員から説明があり、西川議長から挨拶の後、展示会場内の視察を行った。



公式代表団一行を出迎えるディスプレイ

### ■説明の概要

#### （フィエラ・ミラノの概要）

フィエラ・ミラノの展示会場では、幅広い分野にわたり世界的に有名な国際フェアを数多く開催してきた。

展示会場は20のパビリオンに分かれているが、中央に歩行者専用通路が通っており、通路から両側にある各パビリオンにアクセスでき、広い割に移動しやすい設計となっている。

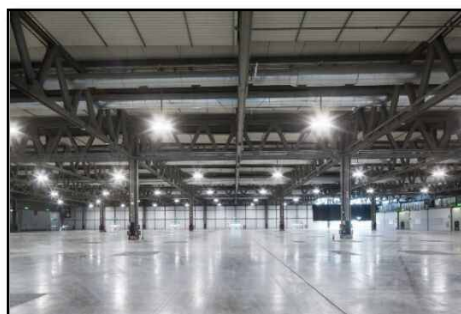
20 のパビリオン合計で 34 万 5 千  $\text{m}^2$  の展示面積がある。このほか、6 万  $\text{m}^2$  の屋外スペースがあり、大きな展示会が開催される夜にはそこでコンサートが開催されるなど、人々が楽しめるイベントを行うことができる。



フィエラ・ミラノの全景

また、展示会場に訪れる多くの来場者に対応できるよう 1 万 5 千台分の駐車場が用意されている。

これ（右の写真）はパビリオン内部の様子であるが、鉄柱との距離をとることができ、スペースが広く他に邪魔されない利点がある。一つのパビリオンの展示面積は平均で約 1 万 7 千  $\text{m}^2$  である。



1 年間で約 50 の国際フェアが行われ、その内容は一つ一つ異なるが、パビリオンに飾りがないなど非常にシンプルな構造であるため、展示会の設置を行いやすいという利点がある。

パビリオンは 3 階建ての構造となっており、例えば上部の空間を利用して訪問者やバイヤーなどが楽しんだりリラックスできるようなスペースを設けたり、そこで音楽を演奏するなど、単に見るだけでなく、展示内容に応じた様々な企画に対応できるようになっている。私たちフィエラ・ミラノのスタッフは、展示会に関する全部の企画を調整するという重要な役割を担っている。

13 番・15 番のパビリオン（右の写真中、左下の緑色で囲った部分）は、一般的なパビリオンとして使用することをやめ、コンサートやスポーツなどのイベント用スペースに転換しようと企画している。



(ミラノ・コルティナ 2026 年冬季オリンピックに向けた対応)

ミラノ・コルティナ 2026 冬季オリンピックでは、この 13 番・15 番のパビリオンを改装して一つのスケート会場として使用する予定である。

13 番と 15 番の間の壁を取り払い、代わりに天井を支えるための別の鉄柱を設置する様子をビデオで視聴した。

また、13 番・15 番の通路を挟んで反対側（前ページの写真では上側）の 22 番・24 番パビリオンは女子アイスホッケーの会場となる予定である。

スケート会場には 7,800 人分の観客席のほか、VIP 席、選手用の更衣室、オフィスを設置する。一方、アイスホッケー会場はスケート会場の半分の規模で、4,000 人分の観客席、選手用の更衣室、バスルーム、練習用スペースを設置する。

スケートやアイスホッケーの競技において一番重要なのは温度管理であり、会場、観客席、更衣室それぞれの温度調整にかなりの時間を要した。

実際にオリンピックの競技会場に供するのに先立ち、会場が問題なく使用できるかテストするため、スケートとアイスホッケーそれぞれで 20 歳以下の選手による競技を行った。



説明を聴取する様子

(セキュリティー検査)

展示会場に入るためのセキュリティー検査が厳しく行われており、何段階もの検査を受けて入場できるシステムとなっている。出展のために物を搬入する際のほか、中で働く人に対しても検査が行われる。展示会の開催時には、三つの入口それぞれに設置された金属探知機により検査を受け、必ず証明書をつけて入場していただくルールとなっている。

## ■西川議長の挨拶（要旨）

冬季オリンピックが近くお忙しい中、こうして我々を受け入れていただき感謝申し上げます。

私たちは、名古屋の国際展示場をしっかりと整備しなければいけないということで、使いやすく、来場者に来ていただいて有効に活用してもらうためにはどういう工夫があるかなど、いろいろな課題について勉強させていただきたいと思い、受け入れをお願いした。

名古屋だと一つの展示場で一番大きいホールが2万平方メートルであり、フィエラ・ミラノの展示面積34万平方メートルというのは私どもなかなか想像できず規模感がつかめなかったが、今、スライドで見せていただきながら説明をお聞きし、なんとなくイメージがわいてきた。

名古屋の今後の国際展示場の活用など、規模は違うがいろいろ勉強させていただきたいと思うので、忙しい時間だと思うがよろしく願います。

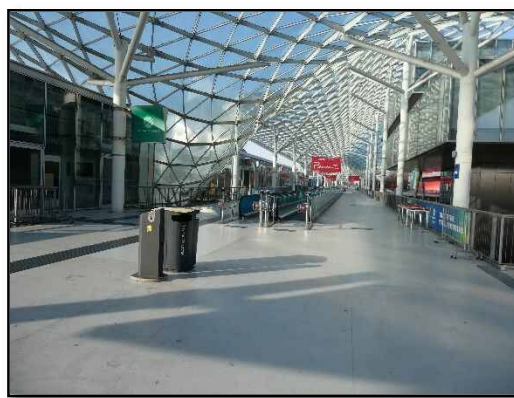


挨拶する西川議長（左側）

## ■会場内及び視察の様子



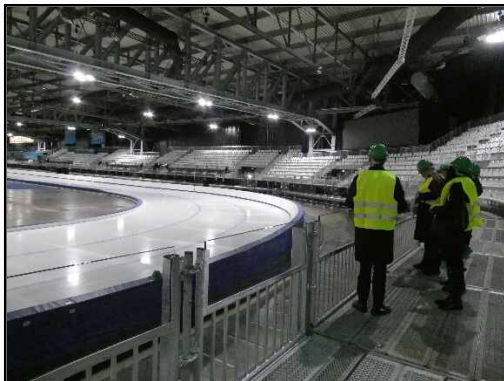
前方にゲートが見える



1.2キロある歩行者専用通路



- ・ 展示会場の年間の稼働率は約 80%で、8 月と 12 月のクリスマス前は低調。
- ・ 視察の前日まで職人展が 9 日間開催され、全パビリオンの約半分が使用されていた。(1 社につき 9 m<sup>2</sup>) 本日は撤収日でレストランも休業している。
- ・ フィエラ・ミラノで行われる最大の展示会は家具の展示会で、パビリオン全部が使用される。(1 社につき平均約 700 m<sup>2</sup> × 約 800 社)



オリンピックのスケート会場となる 13 番・15 番パビリオン  
オリンピックに向け 8 月から改装を開始した



### オリンピックのアイスホッケー会場

先日、20歳以下の選手で競技を行った際の国旗が掲げられている。オリンピックに向け10月から改装を開始した



### 一般的なパビリオン



## セントラル・デッラ・アクア（上下水道施策調査）

- 時 間：12月15日（月）午後3時10分から午後4時15分
- 場 所：セントラル・デッラ・アクア（ミラノ市）
- 対応者：MM S.p.A. 水道・下水道部門責任者 ファビオ・マレツリ氏  
セントラル・デッラ・アクア職員

セントラル・デッラ・アクア（Centrale dell'Acqua）は、ミラノ市における「水工場」としての使用を経て、2018年に再開発された、19世紀末から今日までのミラノ総合水道事業が歩んできた歴史について学べる施設である。

セントラル・デッラ・アクアでは、同施設職員及びMM S.p.A. 水道・下水道部門責任者 ファビオ・マレツリ氏から説明があり、西川議長から挨拶の後、施設内の視察を行った。

### ■説明の概要

#### （MM S.p.A. の会社概要）

MM S.p.A. では多くのエンジニアが仕事をしている会社であり、地下鉄、環境問題、住宅関係などの事業を行っている。水道サービスの管理については22年の歴史を持っている。

#### （セントラル・デッラ・アクアの施設概要）

この施設は1906年に水道施設（工場）として設立され、1980年まで稼働していたが、スペース的に手狭となり、2018年から博物館として一般に公開されている。

この施設では、水道に関する歴史を紹介しているほか、コンサートなどのイベントも行われている。学生の訪問も非常に多く、学校から年間に七、八千人の学生が訪れる。

(ミラノの水道システム)

ミラノ大聖堂「ドゥオーモ」付近から 2,000 年前の水道管が発掘され、ローマ帝国の時代から水道があったことが分かっている。

昔からミラノのまちでは井戸から地下水をくみ上げていた。昔は各家庭で井戸を掘り起こし生活用水として使用しており、無数に井戸があった。



ファビオ・マレツリ氏

ところが、1800 年代になるとコレラが流行し、家庭の井戸から地下水をくみ上げて使用する方法から転換する時代となった。コレラが流行したのは、くみ上げる地下水の近くを下水が流れており、そこから菌が流入したことによる。

コレラの流行と人口の急激な増加のため、公共の上下水道を整備する必要があった。

1888 年に公共の水道の整備が始まった。地下二、三十メートルのところ井戸を二つ掘り、そこから地下水をポンプでくみ上げ、お城の方に配水するようになったというのが最初の公共の水道である。つまり、お城の中に公共の水道システムが出来上がったわけである。

ミラノの水道は、地下から水をくみ上げ、それを浄化して貯蓄し分配する方式をとっている。

その後、最初のシステムに加え、1900 年代初頭に三つの公共の水道システムが設置された。

1928 年には 17 の公共の水道システムがあったが、人口の増加に伴い需要が増加し、1988 年にはそれが 34 システム、井戸の数は 457 となった。



説明を聴取する様子

かつては石炭を燃焼することによりシステムを動かしていたが、現在は電動に替わっている。

また、現在はコンピューター制御により水道使用量を管理している。

#### (ミラノの下水道システム)

ミラノは都市の面積が広く、緑が多くて水も非常に豊富である。ローマ帝国の時代、レンガにより水道管を設置して地下水を通し、ミラノのまちにローマ水道を巡らせ、まちの中心に水を運ぶことができた。

一歩まちの外に出れば農地があり、昔からの農地に配水する技術が現在でも活用されている。

1800年代に公共の水道が整備され、同時期に公共の下水道も整備されるようになり、これらにより疫病をなくすことができるようになった。それによりミラノのまちが発展することができたといえる。

人口の増加に伴い下水道も大きく延長され、総延長1,450 kmのシステムが出来上がり、現在ではミラノ全体に下水道が巡らされている。その中で調査、検査もしっかりしなくてはならない。

#### ■西川議長の挨拶（要旨）

今日は貴重なお話をありがとうございます。水というものは、やはり人の命であり、また、文明のもとであると思っている。

MM S.p.A.は、公共的なインフラでミラノ都市圏の市民の皆さんの命や生活を守ってみえる組織だと聞いている。

普通、文明というものは大きな川の流域で栄えるものだと思っていた。ローマ帝国はあれだけ栄えた帝国にもかかわらず、大きな川の流域に限らない範囲となっているので不思議な思いがあったが、今、ローマ帝国の技術による水道が川の役割を果たしていたということが分かり、そこにまず感動を覚えた。



挨拶する西川議長（右側）

豊富な地下水のもとで、それを汲み取って水道に活用したのはローマ帝国の素晴らしい力であり、それがヨーロッパ全土を支配権に収めた実力だということに改めて実感した。

名古屋では、木曾川という大きな川の恵みを頂き、そこから導水路で名古屋市内へ水を運び、浄水場でその水を安心安全な水につくりかえ、水道管を通して市民の皆さんに配水している。

今後、ミラノ市と名古屋市がいろいろな意味で交流でき、様々な市民のための運営がお互いにできることを心から願い、最後に、貴重な時間を頂戴したことに心から感謝を申し上げ、私の挨拶とさせていただきたいと思う。

#### ■視察及び施設内の様子



昔ながらのミラノの水栓  
蛇口の下に見えるのはミラノの市章

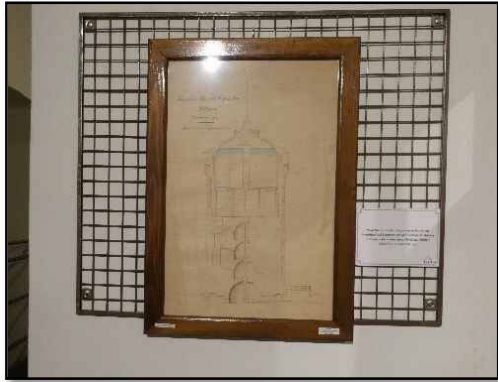


水道管の破損時に補修用の機材を積んだ  
リヤカー（1906年）



電動のエンジン（1920年）

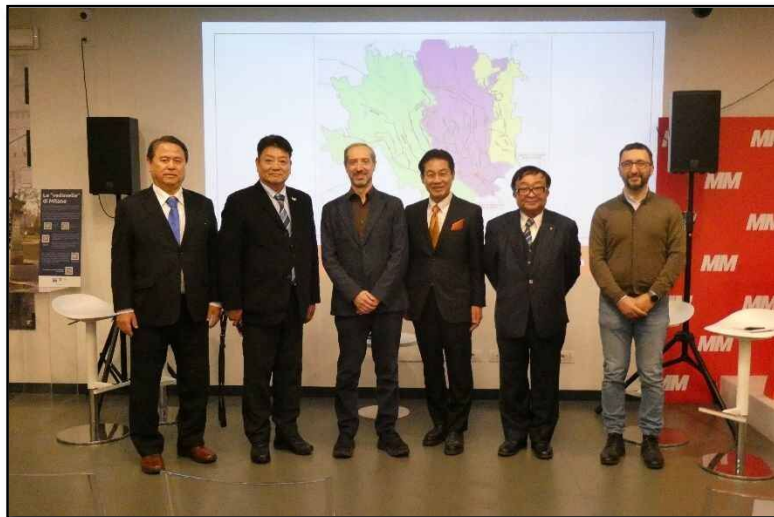




配水塔のデザイン（1900年）



天井の空間を利用した来館者向けの展示



令和7年12月16日（火）

全ての行程を終えた公式代表団一行は、12月16日にミラノ・マルペンサ国際空港から空路でヘルシンキ・ヴァンター国際空港を經由し、成田国際空港に向かい、翌17日に帰国した。

## 追 記

今回の派遣では、トリノ市表敬訪問での記念品提供（39 ページ参照）をはじめ、ご対応いただいた各訪問先に地元名古屋・愛知にゆかりのある記念品を提供し物づくり文化を紹介するほか、12月14日、15日の名古屋市会単独での調査では、名古屋のまちの魅力や市の施策等、名古屋市の概要を紹介する冊子「市勢要覧なごやマイタウン」（英語併記あり）を提供するなど、行程全体を通して地元名古屋・愛知のPRも積極的に行った。

以下、一部ではあるがその様子を掲載する。



トリノ工科大学にて  
(次ページ①と②を提供)



ウンベルト1世高校にて  
(味噌煮込みうどんについて説明する様子)



お世話になったトリノ市職員の皆さん  
(次ページ①を提供)



セントラル・デッラ・アクアにて  
(次ページ③と名古屋のブランドロゴバッジを提供)



①多機能ペンとペンケース

多機能ペンはジェットストリームと愛知の家具ブランド「karimoku」のコラボレーション商品で、名古屋のブランドロゴを刻印  
ペンケースはソファなどに使う革の残材を再利用したもので、カリモク家具（株）のご厚意により提供いただいた



②姫ゆかり 初音の調度

えびせんべい「ゆかり」の徳川美術館とのコラボレーション商品で、缶は同美術館所蔵の国宝「初音の調度」がモチーフ



③名古屋城本丸御殿 釘隠根付  
くぎ隠しをモチーフにしたチャーム

**NAGOYA MY TOWN  
2025**



独自の魅力と多彩な文化が豊づく、かつてない進化を遂げるまち。  
With its distinctive charm and diverse culture very much alive, this town has been evolving in its own way.  
This truly unique Nagoya outline.  
なごやマイタウン 2025

市勢要覧なごやマイタウン

## お わ り に

名古屋市会トリノ市姉妹都市提携 20 周年記念公式代表団一行は、関係者の多大な協力を得て、トリノ市、ミラノ市及びロー市における表敬訪問、姉妹都市提携 20 周年記念交流行事への参加及び調査を無事終えることができた。また、「追記」で触れたとおり地元名古屋・愛知のPRも積極的に行った。

トリノ市では、各訪問先で手厚く歓迎いただき、これまで積み重ねてきた両市の友好・交流の絆を深く感じた。特に、ウンベルト 1 世高校で多くの学生に囲まれ心温まる歓迎を受け、名古屋市立大学への留学を目指す学生に出会えたことは非常に喜ばしく、そこに今後、両市の友好・交流が一層深まり、強い絆で結ばれていく未来を予感した次第である。

トリノ市では、レッジョ劇場や博物館・美術館を訪問するほか、「Degustando Washoku」に参加し、食や音楽、芸術には国境がないことを改めて実感した。また、トリノ工科大学では、日本から同大学への留学の状況をお伺いするとともに名古屋市立大学からの留学生と現地で交流する中で、両市・両国間における若者たちの更なる交流の促進が大切だと感じた。

さて、令和 8 年は日伊外交関係樹立 160 周年に当たり、来る令和 9 年の 1 月には、レッジョ劇場で名古屋フィルハーモニー交響楽団の海外公演が行われ、2 月には、トリノ市立近現代美術館の協力の下、名古屋市美術館で「アントニオ・フォンタネージ展」が開催される予定である。両事業が成功し、名古屋市とトリノ市との更なる交流の促進につながるよう、名古屋市会としても積極的に後押ししてまいりたい。

また、今回、訪問したヴェナリア宮殿保存修復センターでは、修復士養成の取組についても話を伺い、文化財保存修復における技術の継承や人材育成の重要性について改めて実感した。産業経済状況調査で訪問したフィエラ・ミラノは、訪問後、ミラノ・コルティナ 2026 冬季オリンピックの競技会場として幾度となくテレビに映し出され、非常に感慨深い思いである。

これら今回の訪問・調査で得られた知見は、今後、名古屋市政発展のため、議会活動に生かしてまいりたい。

最後に、今回の派遣に際し多大なご尽力を賜った全ての関係者に心から感謝を申し上げ、報告書を締めくくるとしたい。